

言語についての私見

伊 東 博 司

ミクروسコピアという科学雑誌が昨年11月に終刊となりました。この雑誌は26年間にわたり1年に4冊ずつ季刊として発行され、生物学関連の事柄を中心として、とても幅広い領域にわたる情報を発信してきました。生物学以外の事柄としては、人力ヘリコプターの製作、世界の名山、研究者の個人的趣味、電顕写真とヌード写真の合成画像など様々の事柄をミクロスコピア誌が掲載してきました。それらのなかで、ミクロスコピア92年秋号に掲載された言語についての記事が私の記憶に残っています。その記事には、科学の分野全般では英語が公用語化しているが、ロボットと地震の領域ではもっぱら日本語が使われているということが書かれていました。

ところで、今も昔も科学研究の成果は学会発表あるいは論文・著書により公開され、伝達されていきます。自然科学の分野では、この情報公開と伝達に、英語、ドイツ語、フランス語など種々の言語が用いられています。とは言うものの、世界全体でみると現在までの数十年にわたって自然科学分野では情報発信の大部分が英語によってなされています。今から30年近く前である1981年の調査では、生物学の文献のうちの86%が英語で書かれており、医学文献はその73%が英語論文であるという結果がでています（宮島達夫：「言語的不平等と日本語教育」日本語学91年1月号からの孫引き、宮島氏のこの論文はミクロスコピア94年秋号に引用されている）。現在では科学文献全般において英語が占める比率はさらに高まって、たぶん90%を越えているのではないかと思います。

このような英語の独占状態になった理由は多々あるのですが、ただ、こんな状態は極めて不公平だと私は思います。日常語が英語である所で生まれ育った人は科学界の「公用語」を楽々と身に付けられるのに対して、英語を日常語としない国、例えば日本で生まれ育った人は、苦勞を重ねて英語を勉強してからやっと科学の「公用語」を使えるようになる。こんな不公平なことはありません。さらに、日本人研究者が英語の勉強に費やす時間を、アメリカ人研究者・イギリス人研究者は自分の専門分野の研究に使えるわけですから、ますます不公平です。前掲の宮島氏の論文でも次のように記されています。「日本科学技術情報センターでは、おおくの人員と金をつかって、日本の科学技術文献の要旨を英訳している。これは、英語のよめる世界中の科学者・技術者のためだが、けっきょく、いちばん得をするのは、やはり英米人である。もし、アメリカが自分の金で英語論文に日本語の要旨をつけてくれたら、どれだけたすかることか。たいへんな不公平である。だが、かれらは、そんなことは夢にもかんがえないだろう。人種のルツボ、ということばの実態は、先住民の言語をほろぼし、移民の言語を英語一色にぬりつぶすことだった。」

では、このような不公平をなくするにはどうすればよいか。かつて科学で盛んに用いられたドイツ語を英語が駆逐したように、日本語が英語に取って代わればいいのでしょうか。決してそうではありません。日本語が科学の公用語となったときに楽なのは日本人だけで、日本語が日常語でない人々は日本語を勉強するという苦勞を背負うこととなります。ある国の日常言語を公用語として使うことでは決して公平にならないのです。しからばどのようにして科学界の言語状況を公平にすることができるのか。一つの答がエスペラントの使用です。平等な国際語として考えられた中で、いま最も実用に供されているといわれるエスペラントは、文法は実に自由で簡単、日本語から援用された部分もあるのだそうです(本田勝一著「中学生のための作文技術」朝日選書)。ただし、エスペラントはヨーロッパ語に偏重しているそうですから、その偏重をなくして、言語としての平等性・公平性をさらに推し進めるべきです。そのためにはエスペラントに変わる新たな人造語を作るしかありません。エスペラントはザメンホフという一人の人間により今から120余年も前に発表されたのですから、エスペラントに代わる人造語を新たに作り出すことは、あながち夢物語ではないと思います。もしも、日本が中心となって、新しい国際語を作り出すことができれば、これはまさしく人類史上に残る国際貢献となります。世界中の人々が公平な立場で世界共通語を学ぶようになれば、なんとすばらしいことでしょう。また、アメリカ発の金融危機のために、世界に対するアメリカの影響力が弱まりつつあると見なされる今こそが、英語の独占を切り崩す良い機会ではないでしょうか。

この新人造語ができるのがいったい何年先になるのか見当が付きませんが、それまではとりあえずエスペラントを科学分野の共通語として使用するとともに、人類の共通語として使うしかありません。かつて、私は歯学部某委員会で、奥羽大学学生にエスペラントを教えたらどうかと提案したことがあります。エスペラント教育が実現したら、学生に混じってエスペラントを学ぼうという魂胆でしたが、その委員会では一顧だにされませんでした。身近なところでエスペラントを学ぶ機会はあるもはやありそうもないので、停年後の楽しみとしてエスペラントを勉強してみようと思う昨今です。

(奥羽大学歯学部口腔病理学分野)